

今年の夏、恵泉デー実行委員の先輩からお誘いを受けて「ユネスコキャンプ夏の集い」に参加しました。ユネスコとは、これからの時代を担う世界の青少年に期待し、彼らの声に耳を傾け、その力を最大限に伸ばしていくことを使命としている団体です。

9カ国の参加者がいて年齢層も幅広く、5歳から72歳までの方がいました。ほとんどの人が初対面で私は緊張していました。しかし最終日には皆と別れがととても辛かったです。2泊3日のキャンプは私を大きく変えてくれました。顔も年齢も出身地も人種も違うバラバラな皆を結びつける大事な役割を果たすのが私を含むスタッフでした。やはり外国の方と話さなければ、と思うものの、なかなか口を開けないでいると、タイ人の女の子が「名前は？」ときいてくれて、そこから互いに慣れない英語と日本語を使い、どんどんと会話が弾むようになりました。同じ日本語でも少しやさしい言葉に置き換えたり、頭の中で英語を日本語にしたりする作業をしたのは初めてでした。しかし、目を見て話すことにより相手が何を伝えたいか次第にわかるようになりました。気がついたときには冗談も交ぜて沢山の国の方とお話ししていました。

今回のキャンプは「世界を知る」というテーマだったので「もし世界の人々が百人の村になったら」という題のもと、キャンプの参加者全員で話し合いました。村に住む人のうち20人は栄養が足りず、15人は太りすぎです。そして1人は死にそうな状態です。また、村人のうち1人が大学に行けて2人がコンピュータを所持しています。しかし、14人は文字の読み書きができません。村人の持っている全ての富の内うち、6人が59%の富を持っています。その6人は皆、アメリカ合衆国の人です。そして74人が39%を、20人がたった2%の富を分け合っているのです。これを聞き、皆さんはどう考えますか？私は本当に裕福すぎる程の生活を送っています。学校に行きたくない、これは食べたくない、などとわがままを言っている場合ではないと、自分の立場を客観的に見つめ直すことができました。

また、どうしたら世界の人々全員が仲良くなれるかについて話し合いました。やはり宗教や習慣、価値観などの違いをきちんと受け止め一緒に生活し互いを肌で感じ合うことが大切なのではないかと私は考えました。しかし、小学校の

子どもが「世界の人たち皆で大運動会をしたい。国をごちゃまぜにしてランダムにチームを作って皆平等にスポーツを楽しみたい!」と言ったのです。そういう考え方があったのかと私は驚きを隠すことができませんでした。大人になるにつれて、考え方はどんどん現実化的になってしまい、夢がなくなります。このような子どもたちの夢があるからこそ、子どもたちの声に耳を傾けて、世界を変えていかなければならないのではないのでしょうか。

今回のキャンプで私はスタッフらしい行動が余りできませんでした。この後悔をバネにし、これからユネスコスタッフとしていろいろなイベントに参加して行きたいと思います。私が誰かのためにできることは、物資の支援ではありません。人として、いろいろな人と関わり笑顔になることです。まだまだ先が見えない世界と繋がっていくために、私は今回のキャンプで出会った仲間を大切にし、お互いに協力し合う人間関係を築き上げていきたいと強く思いました。